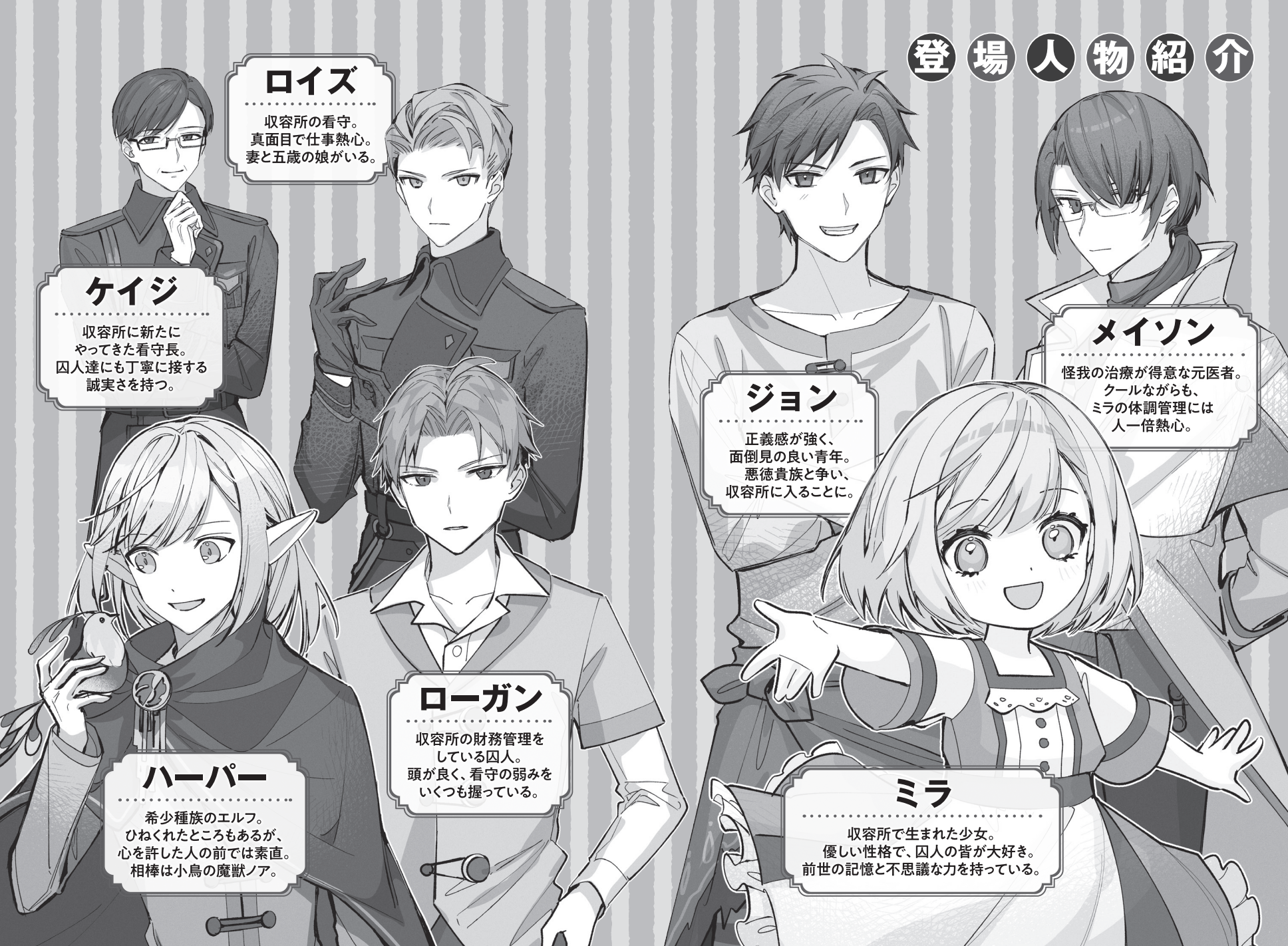
収容所生まれの転生幼女は、囚人達と楽しく暮らしたい 2

三園 七詩

Illustration

喜ノ崎ユオ

登場人物紹介


ロイズ
収容所の看守。
真面目で仕事熱心。
妻と五歳の娘がいる。
ケイジ
収容所に新たに
やってきた看守長。
囚人達にも丁寧に接する
誠実さを持つ。
ハーパー
希少種族のエルフ。
ひねくれたところもあるが、
心を許した人の前では素直。
相棒は小鳥の魔獣ノア。
ローガン
収容所の財務管理を
している囚人。
頭が良く、看守の弱みを
いくつも握っている。
ジョン
正義感が強く、
面倒見の良い青年。
悪徳貴族と争い、
収容所に入ることに。
メイソン
怪我の治療が得意な元医者。
クールながらも、
ミラの体調管理には
人一倍熱心。
ミラ
収容所で生まれた少女。
優しい性格で、囚人の皆が大好き。
前世の記憶と不思議な力を持っている。

プロローグ

私はミラ、五歳だ。

生まれはこのサンサギョウ収容所、私のお母さんは私を身ごもったままこの収容所に収監されていたようで、私を産み落としたあと、すぐに死んでしまった。

この収容所にいる囚人のみんなはそんな不運な生まれの私を大切に育ててくれた。

特にお母さんの隣の牢屋にいたジョンさん、元医者のメイソンさん、書簡部にいて頭のいいローガンさんに、エルフのハーパーの四人は、親代わりみたいによく面倒を見てくれる。

そんな私には秘密があった。

それは日本で暮らしていた前世の記憶がある事。

少し前はその記憶を活かして収容所で料理をしてみたんだけど、そのせいで看守が私の料理に目をつけてしまった。

看守には私の存在は隠しているので、代わりにハーパーが独房に入れられてしまう騒ぎが起きたんだよね。

その後、みんなの力を借りてハーパーを独房から出す事に成功して本当によかった。

そんなこんなで、いつも通りの日常が戻ってきたんだけど……。

一　新たな部署

ハーパーが戻ってきた事に喜んでいたのもつかの間、新しい看守長が来た事で収容所の中は色々とバタバタしていた。

これまでは看守は乱暴で囚人のみんなに酷い事をしていたんだけど、新看守長が来て、その横暴が減ったんだよね。

看守達にも入れ替えや降格など役職の変化があったらしいけど、それは囚人達にとってはいい事で、収容所内の雰囲気は前よりよくなったと思う。

喜ばしい事はそれだけでなく、看守達の監視の目も前よりは少し甘くなり、食材も昔よりも新鮮な物が支給されるようになった。

そしてその影響で、新しい部署が二つ作られたんだけど――

「なんで僕が責任者なんだよー！」

ローガンさんの部屋で、ハーパーが嫌そうに騒いでいた。

そう、ハーパーは新しく出来た部署の一つ、「農産部」の責任者の候補になったのだ。

この収容所には、収容所の裏で採石を行う「採掘部」、衣服の裁縫などをする「洋裁部」看守の給料などの会計管理をする「書簡部」の三つの部署があった。

ほとんどの囚人達はその部署に所属して仕事をしているんだけど、今回はそこに農産部が出来たという事だ。

農産部は収容所内にある畑を管理し、囚人達が食べる作物を作る部署らしい。

まぁ農家のような仕事をするという事だろう。

今までも畑はあったんだけど、時間がある人や土いじりか好きな人が適当に使っていただけだったので、きちんと部署を作り、作物を育てさせる事にしたらしい。

「ハーパーが適任だろ。意外とマメだしな」

ジョンさんが諦めろといった様子で、いつまでも駄々をこねるハーパーを睨みつけた。

「僕は面倒な事は嫌なの！」

しかしハーパーはそれでも納得していないようで、ジョンさんを睨み返していた。

「野菜作り、ハーパーに合ってると思うな」

そんなハーパーに対し、私は思わずボソッと呟いた。

「え？」

するとハーパーが私の言葉に反応する。

「ハーパーが作る野菜食べてみたい！　私も手伝うからやってみない？」

ハーパーに近づいて顔を見つめると、複雑そうな顔になった。
しかししばらく悶えたあとに、諦めたように肩を落とした。
「あー！　もう、分かったよ！　やるよ、やればいいんでしょ」
ハーパーはやけくそになりながら叫ぶと責任者になる事を承諾してくれた。
「わーい！」
私はこれから出来るであろう野菜に胸を躍らせ飛び跳ねた。
ローガンさんは困ったようなハーパーを見てクスクスと笑っていた。
「フッ、ハーパーもミラにかかればなんて事ないですね。では責任者が決まった事はあとで私が看守に報告しておきましょう」
「え、私？」
なんの事だろうとハーパーとローガンさんを交互に見つめた。
「ミラ、ハーパーがサボらないようにしっかりと監視しておいてくださいね」
ローガンさんにそう言われ、私は答える。
「ローガンさん大丈夫だよ、ハーパーはちゃんと決められた事はしっかりやってくれるもん。なんてったって私のお兄ちゃんだし」
血は繋がっていないけど、私はハーパーをお兄ちゃんみたいだと思っているのだ。
自信満々な私の言葉に、ローガンさんは驚いた顔をする。

「これはハーパーも責任ある行動を取らないといけませんね」
「あーあ、分かってるよ」
苦笑したハーパーを見て、私は少し不安になった。
「ごめんねハーパー、お兄ちゃんって言ったら駄目だった？」
「違うよ、ミラのためにも頑張るかって思っただけ」
ハーパーは眉を下げながらも笑顔で私の頭を優しく撫でてくれた。
こうしてハーパーは新たに出来た農産部の責任者となったのだった。
すると、ローガンさんが事前に用意していた農産部の名簿をハーパーに渡す。
十数人の囚人が新たに農産部として働く事になったらしい。
「仕方ない。こうなったからにはミラのために美味しい野菜を育てるか……」
ハーパーは文句を言いながらも、これから下につく囚人達の名簿を確認している。
「これからは囚人達にも規則的な休みが与えられるそうです。勤怠管理も責任者の仕事ですので、よろしくお願いします」
ローガンさんが笑顔で言うとハーパーが口をポカンと開けて固まった。
「ハーパー⁉　大丈夫」
動かないハーパーの体を揺すってあげると、ハッとして動き出した。
「いきなりめんどくさそうじゃないか！　やっぱりやだー！」

名簿を放り投げようとするのをローガンさんに止められる。
「もう言質は取りました。諦めて頑張ってください。まぁどうしても無理なら相談してください」
ローガンさんはそう言うと、笑みを浮かべた。
「めんどくせー」
ハーパーは「はぁー」と深くため息をついた。
「ハーパーごめんね。大変なの知らなくて軽くお願いしちゃって」
嫌がる事を強要してしまったと思ってハーパーに謝った。
「ミラのせいじゃないよ、クソ！　こうなったらローガンが文句言えないくらい完璧にこなしてやる！　まずは早速畑に行くか」
ハーパーは気合を入れるようにそう答えた。
「ノア、ハーパーはやっぱりやれば出来るお兄ちゃんだね」
そう言って、私は思わず笑ったのだった。

ハーパーの農産部入りが決まり、私はもうひとつ新しく出来た部署に向かう事にした。
いつものように洗濯物が積まれたカートに隠れて移動する。私はいつもこれで看守から身を隠しているのだ。
ちなみに、今回はローガンさんが押している。

そして、目的地である食堂に着く。
そこにはニコニコ顔のビオスさんが待っていた。
看守が近くにいない事をローガンさんから確認すると、私はカートから飛び出す。
「ビオスさん！　こんにちは」
「おうミラ、今日も元気だな！」
そう、新しく出来たのは「調理部」なのだ。
この収容所では以前から囚人達が料理を作っていたのだが、正式に部になったという訳である。
ビオスさんは元料理人で、以前からここで囚人達の料理を作っていたから、自然と調理部の責任者になったらしい。
ビオスさんはみんなにはぶっきらぼうで言葉も乱暴な時があるが、私にはとっても甘いおじいちゃんみたいな人だった。
「ではビオスさん。これが調理部になる囚人の名簿です。ここにはミラも出入りするので口が堅そうな者を集めておきました」
ローガンさんはそう言って、名簿を渡した。
ビオスさんはペラペラと内容を確認し、答える。
「まぁミラがいれば調理部は大丈夫だからな」
「えへへ」

ビオスさんに頼りにされたのが嬉しくて、思わず照れ笑いをした。
以前私は前世の料理をビオスさんに教えて二人で美味しい料理を作り出した事がある。
その事もあり私は調理部の裏方としてここで働く事になったのだ。もちろん私の事は看守に秘密である。
ちなみに前はビオスさんには前世の記憶の事は内緒にしていたけど、調理部を入るならビオスさんにも伝えておいた方がいいという事で、ローガンさんが私の事情も伝えてくれている。
ビオスさんは私に記憶がある事をちっとも気持ち悪がらないで、むしろ色んな料理を知っていて凄いと褒めてくれた。
そんなビオスさんのためにも、私も頑張ろうと思っている。
加えて、調理部は食堂奥の厨房で活動するのがメインなのだが、なぜか最近は看守達の目が甘く、あまり見に来ないようになっていた。
それでも絶対に来ないとは言い切れないので、調理場には足元に隠れられる隠し場所を作ったり、食料庫には食材用の空箱を置いたりして、いつでも隠れられるようにしている。
「でも厨房を改造して看守に怪しまれないかな？」
私は足元の隠れ場所に入ってビオスさんを見上げた。
「調理部を作るに当たって食料庫を新たに整備したり他の部屋も綺麗に作り直したりしたからな。違和感はないだろ」

それは初耳だ。
いつもながら囚人のみんなスキルには驚かされる。
これだけ人がいると色んな特技を持った人がいるようだ。
ローガンさんも私が隠れる場所を念入りに確認している。
「問題なさそうですね、これならそうそうバレる事はなさそうです」
足元の隠しスペースなどは蓋を閉じると、普通の床にしか見えない。
これならここに人が入っているなどと思わないだろう。
「それに裏からは農産部に繋がっていますからね。何かあったらハーパーが駆けつけてくれるでしょうしね」
食料庫の一つ隣の部屋からは、庭に出られるようになっている。
庭と言っても収容所の敷地内ではあり、周りは高い塀に囲まれている。
ここが一番日当たりもよくて食堂にも近い事から農産部の畑になっていた。
ここで取れた物がすぐに食堂の食料庫に保管されるようになっているのだ。
「まぁ食材が取れるようになるのはもう少し先ですけどね、しばらくは外から食材を仕入れるそうです。食材についてはビオスさんが看守と話し合って決めてください」
「おう、分かった」
ローガンさんの言葉にビオスさんはこくっと頷くと、私を見た。

「なぁに？」
「ミラ、作りたい物があったら俺に言えよ。看守に言って取り寄せてもらうからな！」
「やった！」
私は何を作ろうかと早速考えると、ローガンさんは注意するように口を開く。
「一応ミラの事は囚人達には知られていますが、あまり騒ぎにならないようにお願いしますよ」
「はぁーい」
「分かってる分かってる」
私とビオスさんはローガンさんの小言に適当に返事する。
そして、改めてビオスさんは私を見つめた。
「それで、今日は何を作る？　なんかいいアイデアあるのか？」
「そうだなー。とりあえずは今ある物で作らないとだよね。よし早速食材を確認しよう！」
「おう！」
私とビオスさんは食料庫に走った。
「やれやれ、大丈夫でしょうか……。私はもう行きますからねー」
後ろからのローガンさんの言葉に手を上げて答え、そのまま食料庫に入る。
前にたくさんの食材を看守長が差し入れてくれたのだが、その残りがまだあった。
私達はその中から使えそうな物を物色する。

「ミラ、これはどうだ？」
ビオスさんが余った野菜を手に取って見せてくる。
「うーん、量が微妙だね。みんなの分を作るとなると大変かも……でもこのままももったいないしなー」
鮮度はいいが量が少なく、どう使えばいいか迷ってしまう。
「他の野菜と混ぜて炒めるか？　またパンを作って添えれば問題はないと思うが……」
ビオスさんがパンで使った小麦粉が入った袋をポンと叩く。
「小麦粉……」
私は小麦粉と野菜を交互に見つめた。
「あっ！　これなら食材を無駄なく使えるかも！」
私が顔を輝かせるとビオスさんは待ってましたという笑みを浮かべた。

私達は小麦粉の袋と、野菜などの食材を持って厨房に移動した。
「まずは生地を作るよ。えっと待ってね、確か生地の作り方は……」
私は前世の記憶を頑張って思い出す。
私が作ろうとしているのはピザだ。
どこかにキャンプに行く番組で男の人が簡単に作れるピザを作っていたのを思い出したのだ。

「確か材料は小麦粉に水とオリーブオイルと塩だけだったんだよね」
あんなに簡単に作れるのかとあの時は驚いたのだった。
「オリーブオイルってなんだ？」
ビオスさんの疑問に私は答える。
「オリーブっていう実から採れる油なんだよね」
「聞いた事ないな。そりゃここにはないぞ」
そんな時はハーパーとノアの出番だ。
すると、ビオスさんも私と同じ事を思ったのか、「ハーパーのところに行ってくる」と言って聞きに行ってくれた。
私は例の隠しスペースに隠れながら待っている事にした。

しばらくするとコンコン、と隠し場所をノックする音がした。
でも私は声を出さずに合図を待つ。
「ミラいいぞ」
ハーパーの声がして私は扉を押して隠れ場所から出た。
「ちゃんと声が聞こえるまで大人しく待ってて偉いじゃん」
ハーパーは私の頭を撫でて褒めてくれた。

「うん！　だってノックされても名前を呼ばれるまでは音立てちゃ駄目なんだもんね！」
看守がたまたま叩く事もあるかもしれないから、声が聞こえるまでは油断せずに待つように言われていたのだ。
すると、ハーパーが尋ねてくる。
「それで、ノアの力が必要なんだって？」
「うん、ノアとハーパーのね！　オリーブの実――というか植物の実から採れる油が欲しいんだ！」
「へー、ミラの前世では植物からオイルが採れる事も知ってたんだ。でもあれは髪に塗るために、女性が使ってたけどな」
ハーパーは「あったかな？」という感じで頭をトントンと叩いている。
するとノアが「クァッ」と可愛らしく鳴いた。
「え？　本当に」
ハーパーはノアの言葉を理解して驚いた。
「ノアなんて言ったの？」
私はハーパーの服を掴んで聞いた。
「むかーし採った事あるって、今出すからさ」
ノアは大きく羽を広げ、ひと鳴きすると目の前に壺が現れた。
これは空間魔法で、魔獣のノアは魔法を使えるのだ。

「はい、これだって。なんの実か覚えてないけど植物の実なのは確かだよ」
壺の中を覗いてみると、トロッとした透明の液体が入っていた。
ビオスさんがスプーンを用意してくれたので、私はその液体をすくって手の甲につけて味見してみる。
うん、無味無臭でよく分からない。
私はビオスさんにスプーンを渡した。
ビオスさんは同じように味見してみると眉をひそめた。
「なんも味しねぇな」
「油ってそんなもんだよね。ノアが出してくれたなら大丈夫だよ」
私はありがとうとノアとハーパーにお礼を言った。
「それでハーパーは農産部どんな感じ？」
私はいつの間にか作業着姿になっていたハーパーを見てニヤニヤと声をかける。
「土いじりは好きだからいいんだけど、人をまとめるのは好きじゃないんだよね」
「ふーん……ならまとめるのは他の人にやらせれば？　ハーパーの右腕の人を作るみたいな」
ハーパーは私の言葉に目を大きく開けて停止した。そして数秒停止したと思ったら大きな声を上げる。
「ミラ、天才！」

「びっくりしたー」
「そうか！　それなら僕は好きな事してそいつにめんどう事を頼めばいいんだ」
ハーパーの言葉に慌てて修正する。
「ハーパーそれは違うよ！　それにその人がなんか間違えた時はハーパーの責任になるんだよ」
上に立つ人はそれはそれで大変な責任と判断を求められるはずだ。
すると、ハーパーはハッとしたような表情になる。
「そうだな、確かに頼むんならそうなるか」
「でもなんでも一人でやるよりはいいと思う！」
私がそう言うとハーパーは少し考えてニコッと笑った。
「確かにな、僕も責任ある仕事を任されたんだ。少しは覚悟を持たないとな……」
ハーパーは仕方ないと笑いながらノアと仕事場に戻っていった。
そして、私達は改めて食材を並べて料理を開始する。
「まずは生地を作るんだな」
ビオスさんは食材を見てなんとなく作る物が分かったようで、大きなボウルに小麦粉を入れた。
「うん、パンみたいな感じでこねるよ」
用意した材料の分量を確認しながら生地を捏ねていく。
細かい材料の比は分からないのでビオスさんの料理人の経験で判断してもらう。

いくつか分量を分けた生地を作って様子を見る事にした。
生地を発酵させている間に具材の準備をする。
「野菜は一口大に切って、根菜は軽く茹でて水気を切るよ」
ビオスさんと手分けして食材の下ごしらえをしていく。
そして、私はビオスさんに言う。
「あとはトマトソースを作りたい」
「トマトソース？」
「ニンニクをさっきのオイルで炒めてトマトを潰して煮るの、水分を少し飛ばしてソースにするんだよ」
「分かった」
ビオスさんはトマトの皮を剥いて細かく切ると、フライパンにオイルとニンニクを入れてトマトを炒めだす。
しばらくそのまま煮つめてソースを作った。
具材を用意し終わると生地の発酵も進み膨らんでいる。
「このあとは生地を適当な大きさに伸ばしてさっきのソースを塗って具材を並べるの。それで上からチーズをかけてオーブンで焼くんだけど……」
「オーブンはここにはねーな」

ビオスさんの言う通り、周囲を見回してもオーブンなんてものは見つからなかった。
私は少し肩を落としながら答える。
「じゃあフライパンで焼いて作ってみようか、時間かかっちゃいそうだけどね」
「美味く作れたら看守にオーブンを頼んでやるからな」
ビオスさんは落ち込む私を慰めてくれた。
気を取り直してフライパンにピザ生地を載せる。
そして具は適当な野菜でチーズを載せて蓋をした。
「あんまり強火だと焦げちゃうかも」
私の言葉を聞いたビオスさんはたまにフライパンを火から遠ざけたりして焼き加減を調整してくれる。
「火加減を気をつけないとな」
そのまましばらく焼いていると、チーズとトマトソースの香りが漂ってきた。
「ん～、いい匂い！　そろそろかな⁉」
私がそう言うと、ビオスさんは火を止め、フライパンを持ち上げて皿にピザを移した。
ピザはチーズが溶けて生地の周りが少し焦げ目がついている。
「うん！　いい感じ、味見してみよ」
「そうだな！」

ビオスさんに切り方を教えると、ピザっぽい三角形に上手く切り分けてくれた。
「美味しそう！　いただきます」
「いただきます」
二人で同時にピザを口に運ぶ。
トマトソースの酸味とチーズの塩味、野菜の甘さがピザ生地とマッチして美味しい！　しかも食べ応えもある。
「んー！」
私は思わずほっぺたを押えた。
ビオスさんの反応はどうかと顔を見ると手にピザを持ってない。
「あれ、ビオスさんピザは？」
「美味すぎて全部食った」
ビオスさんは二枚目に突入しようとしていた。
「あーずるい！　私ももう一枚食べる」
味見のつもりが二人でどんどんとピザを手に取っていく。
すると、あっという間にピザを平らげてしまった。
満足気なビオスさんは空になった皿を見つめた。
「これは美味いし満足感もあっていいな。余った野菜を使えるのもいい。ただ……問題は焼き方

だな」
「そうだね」
囚人は多いし、フライパンで一枚ずつ焼いていたらきりがない。食堂で出すには向いてないようだ。
私は思わず呟く。
「あー、窯があったら一度に数枚焼けるし、美味しさも違うんだろうなー」
前世でも窯で焼いたピザは食べた事がないが、味が全然違うとは聞いた事がある。
一度食べてみたいが、流石にここで食べるのは無理だろうし、残念だ。
しかし、私の呟きを聞いてビオスさんの表情が変わった。
「ミラ、その窯ってのはなんだ？　オーブンとは違うのか？」
「うーんと、石で出来た、丸い形の焼き場かな。中で薪をくべてピザを焼くんだよ。私も直接見た事はないけど……」
自信なく答えるとビオスさんが少し考えている。
「その形は絵に描けるか？」
私が頷くとビオスさんは紙とペンを持ってきてくれた。
分かる限りのドーム型のピザ窯の形を描くと、ビオスさんが真剣な顔で見つめる。
「この扉みたいのはなんだ？」

ピザを入れる扉みたいな物を描いた所に注目する。
「ここで区切られてて、ピザをそこから入れるんだよ。分かりにくくてごめんね」
私が謝るとビオスさんは「十分だ」と言って笑顔を見せた。
「まぁとりあえず、ピザはもう数枚フライパンで焼いておこう。せっかく生地を作ったんだからもったいないだろ」
ビオスさんは私の描いた絵を大事そうにポケットにしまうと、ピザを焼く準備を始めた。
私もピザを焼くのは大賛成なので、他の食材を使いながら数枚焼くのを手伝った。
ビオスさんはピザを数枚焼き上げると、それらを切って皿に並べ、満足そうに腰に手を置いた。
「さてと、ミラは疲れただろうから休んでてくれ、もう少ししたらローガンが集めてくれた調理部の奴らも来るだろう。俺はちょっと用事があるから出かけてくる」
「はーい」
たくさん手伝ったから少し疲れていたので、ビオスさんの言葉に甘えて隠し場所で休む事にした。
私は体が小さいから、隠れるスペースで十分横になれるのだ。
しかもみんながふわふわの布団を用意してくれたおかげで、快適に寝る事が出来るのである。

◆

ビオスはミラが隠し場所に入ったのを確認すると、ピザを持って意気揚々と厨房を出ていく。
そのまま真っ直ぐ進むと扉があり、そこには見張りの看守が立っていた。
「すいません」
ビオスは一旦気持ちを落ち着かせると看守に声をかけた。
「ん、どうした？　どこかに移動したいなら、名前だけ言えばいいぞ」
これまでは棟内の移動にも制限があったのだが、新しい看守長のおかげで今はだいぶ緩和されている。
もちろん時間内に戻らない、他所の棟で喧嘩する、など問題を起こせば罰則はあるのだが、以前ほどの厳しさではなくなっている。
囚人達も問題を起こしたところで自分が面倒になるだけなので、今のところ罰則を受ける者はでていなかった。
ビオスは看守に答える。
「いえね、今料理を試作してまして、よかったら味見でもどうですか？　多いんでお仲間さん呼んでもいいですよ」

看守は美味しそうな匂いにゴクッとつばを呑み込む。
「いいのか!?　ちょっと近場の奴呼んでくるからここにいてくれ！」
看守は慌てて仲間を呼びに向かった。
そしてすぐに数人の仲間の看守を連れて戻ってきた。
「なんか美味いもの食わせてくれるって聞いたけど」
別の看守が少し怪しみながら近づいてくる。
「はい、料理の試食をお願いしようかと」
ビオスがピザを差し出すと、その香ばしい香りに連れてこられた看守もゴクリと喉を鳴らす。
「なんか怪しいな、毒とかじゃないよな」
看守の一人が冗談めかして言うと他のみんなも一瞬無言になる。
そして看守から先に毒味をするようにと言われてしまったビオス。
ビオスはまぁいいと思い、ピザを一切れ取ると口に運ぶ、先程食べた味とは異なるピザを選んでいた。
（……ジャガイモにマヨネーズとチーズを載せたシンプルな物だったが、これまた美味いな！）
彼はそんな事を思いながら勢いよく食べ進め、あっという間に平らげてしまった。
その様子を見て、看守達はお腹を鳴らす。
「だ、大丈夫そうだな。じゃあ」

看守の一人がビオスが取ったピザと同じものを選んで取ると、恐る恐る口に運んだ。
「んまい！」
声を出すとそのまま二口目に突入する。
「よし俺も！」
それを皮切りに他の看守達もピザに手を伸ばした。
そして彼らも凄い早さで食べ進める。
数枚あったピザは看守達の手によってすぐになくなってしまった。
「美味かった……でももう終わりか」
看守の一人は名残惜しそうにからの皿をじっと見つめていた。
「それで味はよかったですかね？」
ビオスは答えが分かっている事をニヤニヤと笑いながら聞いた。
「まぁ美味かったな、これなら食堂で出しても文句はないだろう」
「そうだな、俺も食べにいくわ。いつから出すんだ？」
少し前から、少数ではあるが看守も囚人の食堂にご飯を食べにくるようになっていた。
すると、ビオスはしおらしく肩を落とす。
「こいつは作るのはそう難しくないのですが焼くのに時間がかかってしまい……メニューにするか悩んでいるんです」

「何！　こんなに美味いのに食べられないのか……」
看守達もそう聞いてガックリとしている。
「でも、調理部にこれを焼く用の窯を用意していただけたらメニューに出来るのですが」
ビオスがわざとらしくと大きなため息をつくと、看守達が反応する。
「窯だと、なんだそれは？」
ビオスはミラにもらった紙を看守に見せ、説明した。
「うーん。でもそんなものを作るのはな……」
看守達は腕を組んで悩んでいた。
ビオスはダメ押しに口を開く。
「今作ったのは野菜だけのピザですが、肉を載せて焼いたらもっと美味いかもしれませんね」
「肉!?」
看守の一人がよだれを垂らしそうになる。
「……他の味も気になるな」
「確かにどれも違った味で美味かったな」
看守達は集まってコソコソと相談していると思ったら、くるっとビオスの方を見て声をかける。
「おい調理部の……」
「ビオスです」

「ビオス、窯の件は俺達が看守長にかけ合ってやるから……」
「ありがとうございます！　実際に窯を作るのは囚人の器用な奴にやらせますので！　出来たら一番に皆さんに味見してもらいますよ！」
ビオスは看守が何か言う前にまくし立てた。
「よ、よし！　まぁ看守長も囚人達の振る舞いに気をつけるように言われてたし大丈夫だろ。その代わり約束忘れるなよ」
ビオスは大きな親指を立ててニヤリと歯を見せて笑った。

◆

「うーん」
私――ミラは外が騒がしくなる音に目を覚ました。
ビオスさんを待って休んでいたら結構な時間が経っていたようですっかり眠りこけてしまっていた。
誰が外にいるのか分からずに隠れ場所でじっとしてるとトントンとノックされる。
そのまま静かにしているとビオスさんから声がかかった。
「ミラ、まだ寝てるか？」

起こさないような小さな声に私は安心して返事する。
「ビオスさん、起きてるよ。出ても平気？」
「おう」
ビオスさんの返事を待って私は扉を押して外に出た。
するとそこには十数人程の囚人達が並んでいた。
「ミラ、紹介するぞ。今日から調理部になった奴らだ。みんなミラと面識あるから分かるよな」
確かに顔を見ると何度か話した事のある囚人達ばかりだった。
私が頷くと、ビオスさんが全員に告げた。
「調理部の裏部長のミラだ！　知ってると思うが看守にバレないように細心の注意を払ってくれ」
「「「「「はい！」」」」」
調理部のみんなは大きく頷き返事する。
「皆さん、ご迷惑おかけすると思いますがよろしくお願いします」
私も自分の事なのでしっかりと頭を下げながら挨拶した。
そしてビオスさんに軽く視線を向けた。
「ていうか裏部長ってなぁに？」
「そのままの意味だ」
ビオスさんは当たり前の顔で答えるとみんなも頷いていた。

「へへー、ミラちゃんと働けるなんて天国だよ。なんでも言ってね」
「いや、ここは収容所でどっちかと言うと地獄だけどな！」
囚人達の言葉に笑いが起きる。
和気あいあいとした空気に私も笑ってしまった。
どうやら私の肩書きは裏部長で決まったようだ。
「よーし、まずは調理部の場所や、食材の保管場所の案内するからみんなついてこい」
ビオスさんを先頭に私達は調理部の案内をする事になった。
ついでに私の隠れ場所や出る時の合図の仕方など細かく教えていく。
みんなその時は真剣な顔で聞いていた。
「一通りこんなところだな。まずは三グループに別れて担当についてもらう。料理の経験がある奴は手を上げてくれ」
ビオスさんの言葉に数人が手を上げた。
「よし、お前らはとりあえず料理担当になってくれ」
手を上げた人達は頷き、ビオスさんの方に集まった。
残りは適当に二手に別れてもらった。
「一つは皿洗い、もう一つは雑用に回ってくれ、仕事は一週間交代にしよう。希望があればやりたい場所をやってくれてもいいぞ」

ビオスさんは流れるように囚人達の仕事を振り分けていく。
「ビオスさんすごいね、手馴(てな)れてるね」
私が褒めるとビオスさんは真剣な顔が少し崩(くず)れて眉が下がった。
「前に調理場をまとめてた事があったからな」
恥ずかしそうに頭をポリポリとかいている。
「よーし！　私も頑張らないと、私はどこに入ればいい？」
「ミラは、アイデア担当だ！　料理を作る時は人手が足りなそうな所に入ってくれ」
「はい！」
私は元気よく返事をした。
こうして、調理部が発足したのだった。

そして早速、みんなの夕飯を作る事になった。
まずはビオスさん達と食材の保管場所に向かう。
そこで今日の夕飯に使う物を確認する事にした。
昨日はピザを作ったが、大量生産は無理そうなので他の物を手に取る。
するとビオスさんが思い出したように手を叩いた。
「あっそうそう、窯だけどな、看守が看守長にかけ合ってくれるって言ってたぞ」

「えー！」
寝てる間に何があったのかと驚いてしまう。
「看守にピザを食わせたら一発だ。あんな美味いもの食ったらまた食いたくなるもんさ」
ビオスさんは誇らしそうに鼻息を豪快に出した。
「ピザってなんすかー？」
「食った事も聞いた事もないな」
一緒に食材を見に来た囚人達が首を傾げながら聞いてくる。
「それは窯が出来てからのお楽しみだ！　窯が出来たらピザも料理として提供するぞ」
ビオスさんが笑顔で私を見つめる。
「ビオスさんありがとう！　窯が出来たら他にも色々メニューが増えそうだね！」
私はみんなで食べるピザを想像してワクワクしてきた。
「まぁ窯が出来るまでは今作れるものを考えるぞ、料理が作れる奴も何かアイデアがあったら言ってくれ」
ビオスさんの言葉を聞き、囚人達は口々に言う。
「じゃ俺はスープを作ります。余った食材ぶち込むだけだけど」
「じゃ俺は地元でよく食べてたやつ作るわ」
「俺も」

各々食材を取っていく。その様子をビオスさんと見つめた。
「じゃあ、腕を見たいから各々作ってみてくれ、出来たら試食して大丈夫そうなら今日はその料理を出そう」
「みんなの料理楽しみ、頑張って！」
私は目をキラキラさせてみんなにエールを送る。
「よ、よーし！　ミラちゃんに美味しいって言ってもらうぞ」
囚人達は腕まくりをして各々準備に取りかかった。

ビオスさんと料理を作るみんなの様子を見て回る。ここにいる人はみんな料理経験者だけあって、手際よく料理を作っていた。
中には見た事ない料理もあって、味が気になる。
最初に出来たのはナスに似た食材を持っていった人だった。
「野菜をクタクタになるまで煮て、味つけしてパンに塗って食べるんだ」
そう言って出された物は、野菜のペーストのようだった。
ビオスさんがパンを用意してみんなに渡し、代表してまず試食した。
「うん、ちょっとこれだけだと物足りないが食べられなくない」
ビオスさんが食べると他のみんなも手を伸ばす、もちろん私も一口食べた。

「んー、初めて食べる味！」
ニンニクが効いてて、野菜でもしっかりとおかずになっている気がする。
「うん美味いな、俺のスープと相性いいかも」
するとスープを作っていた囚人が料理を持ってきた。見ると赤いのでトマトが入ってるみたいだった。
こちらも少しずつよそってもらい試飲する。
「あっさりしてるから濃いめの料理に合いそうだね」
私がそう言うと、作った人が肩をすくめる。
「他の食材でも大丈夫だから、余り物スープってとこかな」
「色々入れたら味に深みでそうでいいね」
肉なんかを入れたら立派な一品になりそうだ。
そんな感じで他の人達が作ったものも試食し、味のアドバイスや食材の変更案などをビオスさんが伝えていく。
それを聞きながら、私は思わず叫んだ。
「ビオスさんってやっぱりすごい！」
アドバイスをもらった囚人達も自分の料理を試食しながら嬉しそうに笑っていた。
「でもみんなの料理もすごくよかったよ！　食べた事ないものばかりで嬉しかった！」

また作ってねと笑顔を向けると、みんなは一瞬驚いたあとで、嬉しそうに頷いた。
そのあとはみんなで今作った料理を大量に用意していく。雑用と皿洗い班も交じえて食材を洗ったり切ったり皿を用意したりと大忙しだった。
しかしみんな愚痴をこぼさず楽しそうに仕事をしていた。
そしてある程度用意が終わると、囚人達が料理を食べに食堂にやってくる時間になっていた。
私はビオスさんに促されて隠れ部屋で待機している。
するとしばらくして囚人達がゾロゾロとやってきた。
「あー、疲れたー今日の飯はなんだー」
囚人達が並んで料理を手に取っていく音が聞こえる。
私は自分の事のようにワクワクしながらみんなの反応に耳を傾けた。
「初めて見る料理だな」
「あっ俺これ知ってる！　地元で食ってたなー」
知ってる人もいるようで嬉しそうな声がしていた。
少しすると囚人達の人数も増え、慌ただしくなる。
私はそんな音を聞きながらゆっくりと横になった。

◆

「美味かったよ」
「ごちそうさん」
最後の囚人達が料理を平らげ部屋をあとにするのを確認して、ビオスのおっさんは食堂の扉を閉めた。
食堂には調理部の者達とミラを引き取りにきた俺――ジョンが残っているだけだった。
「よし、さぁ片付けたら明日の仕込みをして終わりだ。最後まで気を抜くなよ」
ビオスのおっさんがそう声をかける前から、調理部の奴らは皿洗いなど各々が出来る仕事をしていた。
「ビオスのおっさん、部下が入ってよかったな」
俺がニヤニヤと笑うとビオスのおっさんは面白くなさそうな顔でふんっと顔を背けた。
相変わらずの態度だと思いながら、俺は続ける。
「ところでミラはどうだ？　こいつらと上手くやれそうか」
「当たり前だ、お前とは違ってミラは素直で可愛いんだ。誰とでも上手く出来る」
ビオスのおっさんは自分の孫のごとくミラを自慢していた。

「ハイハイ、それでその可愛いミラはどこだ？」
連れて帰ろうと厨房の中を覗き込む。
「ミラちゃんならこの下に入ってたよ、おーいミラちゃん」
調理部の奴が扉を軽くノックするが返事がない。俺は厨房の奥に入ってもう少し大きな声で声をかけた。
「おいミラ！　帰るぞー」
「ん……」
中から微かに声が聞こえて扉がちょっとだけ開いた。
俺は指を入れて扉を開くと、ミラが寝ぼけた様子で扉に手をかけていた。
そんなミラを引っ張り出して抱き上げる。
直前まで寝ていたのか、ミラはほっこりと温かかった。
囚人達は笑いながらミラの周りを取り囲み、その顔を見る。
「疲れたんだな、小さい体で頑張って手伝ってくれてたよ」
「本当に、ミラちゃんが一生懸命仕事してるのに俺達がサボる訳にいかないからなー」
「う～ん……みんな頑張って……」
ミラはムニャムニャと寝言を言いながら、お皿を洗うような仕草をしていた。
「プッ！」

その様子に囚人達が思わず噴き出す。
「早く部屋に連れ帰ってゆっくり寝かせてやってくれ」
聞いた事ないようなビオスの優しい言い方に俺は苦笑いしながら頷いた。

◆

私――ミラは目が覚めて周りを見渡すと、ジョンさんの牢にいた。
「あれ？」
いつ来たのか覚えておらず起き上がろうとする。
すると隣で寝ていたジョンさんも目が覚めてしまったようでゆっくりと私を横にさせた。
「まだ早いから寝てろ」
囁かれて頷くとジョンさんの体に身を寄せた。
ジョンさんは安心したのかすぐに寝息が聞こえてきた。
私は横になりながら天井を見つめる。
どうやら私は厨房で寝てしまったようだ。
でも結構寝てしまったのか、今はあまり眠くない。
何気なく天井の染みを数えていると、カツンカツンと足音が聞こえてきた。

看守が見回りに来たようで、廊下の奥から小さな灯りが近づいてくるのが見えた。
私はジョンさんの影に隠れようと体をくっつける。するとジョンさんの腕が私を隠すように動いた。
起きたのかと顔を見るが、ジョンさんは完全に寝ているように見えるし、寝息も聞こえていた。
看守が通り過ぎるまでジョンさんは身動きせずにじっと私を隠していた。
そして足音と灯りが遠ざかり静かな暗闇に戻ると、ジョンさんの腕の力が抜けた気がした。
やっぱり起きていたのかと思うが、先程と変わらずに寝息が聞こえる。
体を動かし、腕から抜けようとするとジョンさんがまたうっすら目を開けた。
「どうした？　眠れないのか？」
眠そうな声と顔で聞いてきた。
「違うよ、今看守が通ってジョンさんが私を隠しながら抱きしめたから、抜けようと思って動いたの」
「え？」
ジョンさんは無意識だったらしく私の言葉に驚いて目を開いた。
「看守が通ったのか？　やばい、全然気がつかなかった」
しまったと顔を手で覆っているジョンさん。
すると私は小さく笑う。

「でもちゃんと隠してくれてたよ？　ありがとう」
私はジョンさんの行動に感謝した。
「ずっとそうやって寝てたからかな」
笑いながら私の事をもう一度抱きしめてそばに寄せた。
「そうだね」
私は寝ながらも守ろうとしてくれたジョンさんに抱きつき目を閉じる。
心地よい体温に私は安心して眠る事が出来た。

二　ピザ窯

次の日、朝起きてからいつも通りジョンさんに連れられて厨房に向かう。
そして朝ごはんの用意を手伝ってから、隠し場所に隠れた。
しかし、なんだが様子がいつもと違う気がした。
いつもなら囚人の朝ごはんを食べるとすぐにみんな仕事に向かい、食堂は静かになるのだが、ずっとこの辺りを人が歩いている気配がする。
仕方なくじっとして待っているとトントンと扉をノックされた。

「ミラ、いいぞー」
声の主はジョンさんで、厨房にまだいるとは思っていなかった。
「ジョンさん？」
私がそっと顔を出すとジョンさんの他にも何人か見知った顔の囚人達がいた。
「あれ？　みんなお仕事は？」
眉をひそめてみんなを見ると、ニヤッと笑顔を見せた。
「今日はここが仕事場なんだよ」
「厨房で仕事なんて嬉しいよなー、でも何作るんだっけ？」
ジョンさんの隣にいた囚人さんがビオスさんに声をかけた。
「お前らには窯を作ってもらう」
「かまー？」
みんななんだと言った様子で首を傾げていた。
「これを見てくれ」
ビオスさんは昨日作ったピザを焼いていたようで、数枚みんなの前に出した。
「美味そうだな！　食っていいのか？」
答えを待たずにもみんないっせいに手を伸ばしていた。
そしてビオスさんがコクッと頷くのと同時に口に運ぶ。

ジョンさんも一切れ掴んで口に運んでいると食べてニヤニヤと笑っていた。
そして私と目が合うともう一切れ取って近づいてきた。
「ミラも食ってみろよ、美味いぞ」
「私は大丈夫、昨日食べたから」
そんな話をしていると、ビオスさんが声を張り上げた。
「これはピザって料理だ、今度メニューに加えたいと思ってる」
「そりゃいいな！」
みんなが手を叩き喜んでいると、ビオスさんが神妙な顔をした。
「だが問題がある、フライパンじゃ作る量に限度がある、そこで窯の出番だ。それがあればピザが一気に作れる訳だ」
「「へぇ～！」」
みんなはなるほどと頷いていた。
「そこでお前らには窯を作ってもらいたい。ちなみにピザを考えたのはミラだからな」
ビオスさんがそう言うとみんながこっちを見た。
「さすがミラちゃんだな」
「それなら尚更いい窯作らないとな」
みんなはやる気が出てきたのか腕まくりしだした。

すると、ビオスさんはなんでもないように告げる。
「じゃ部屋の端の方に三つほどよろしくな。あと換気の穴も忘れるな」
「ちょ、ちょっと待ってくれ！　窯なんて作った事ないのに、三つも作るのか？」
ジョンさんも驚いてビオスさんに聞き返していた。
「一つじゃフライパンとそこまで変わらんだろ、なぁミラ？」
ビオスさんは私に話をふってきた。
「確かに……でもみんな大変なんじゃ」
私は申し訳ないと思い、ジョンさん達を見つめた。
するとみんな突然焦り出す。
「いやいや！　問題ない、ミラちゃんのためならな！」
私の顔を見ててやる気を取り戻してくれたようだ。
「みんなありがとう。よろしくお願いします」
私はジョンさん達に頭を下げた。
「気にすんな。それでビオス、設計図はあるんだよな」
ジョンさんはビオスさんをキッと見つめた。
「ああ、ローガンに話したら、昨日の今日で作ってくれた。じゃ俺達は食材を見てくるからよろしくな。ミラ危ないから向こうに行くぞ」

ビオスさんは設計図をジョンさんに渡すと、私を抱き上げて歩き出した。
「おいおい、この設計図、結構複雑だぞ。なんかしてやられた気がするなぁ……」
後ろからはジョンさんの文句が聞こえてきた。
「ビオスさん、ジョンさん達ほっといていいの？」
なんか申し訳なくてビオスさんに声をかけた。
「大丈夫だ、終わったらミラが〝ご苦労様〟って声をかけてやれば十分だよ」
そんな事でいいのかなぁ？
「あっ！　じゃあみんなにおやつでも作ってあげようよ」
いい考えが浮かびビオスさんを見上げる。
「別にそんな事しなくてもいいと思うが……まぁミラの料理には興味ある」
ビオスさんは笑いながら食料庫に向かってくれた。
そして私を降ろすと、一緒に食料庫をあさっていく。
「ビオスさん、これ！」
「ん？　あぁニンニクだな、それは美味いが臭くなるからな」
普段は少量しか使わないので大量に在庫があるようだ。
「でもニンニクは疲労回復にいいと思うし、使っていい？」
「そうか？　まぁアイツらが臭くなろうとどうでもいいか！」

「匂いは揚げると弱くなるって聞いた気がする」
生のものを刻むと臭いが増すらしい。
私とビオスさんはニンニクを持ってまた調理場に戻ってきた。
ジョンさん達は文句を言っていたものの、テキパキと窯を作る準備を始めていた。
「あれ、なんだ戻ってきたのか？」
ジョンさんが私達に声をかけた。
「いや、料理を作るだけだから気にするな」
ビオスさんはシッシッと近づいてきたジョンさんを手で追い払う。
ジョンさんは怒りながらも作業に戻っていた。
「さぁ気にせず俺達は料理をするぞ」
「い、いいのかな……」
まぁご飯あげれば機嫌も直るよね？
私は美味しく出来るようにとビオスさんに作り方を覚えている限りの知識で伝えた。
「ふむ、丸ごと揚げるんだな。皮を取って少量の油でやってみるか」
ビオスさんはニンニクの頭の部分をザクッと切ると手際よく皮を剥いていく。私もビオスさん程ではないが頑張って皮剥きを手伝った。
「よく火を通すなら弱火でじっくりがいいだろう」

丸ごとのニンニクをフライパンにしきつめて、油を入れて火をつけた。
「よし、これで様子を見よう」
しばらくすると油が熱くなり泡が出てきた、そしてニンニクに火が通り部屋にいい香りがただよう。
ぐぅー！
するとジョンさん達の方からお腹の鳴る音が響いてきた。
「あー、腹減った」
「厨房で作業とか辛い」
囚人のみんなは、いい香りにお腹が空いてきたようだ。
私はビオスさんと顔を見合わせて笑い合う。
「そろそろいいタイミングだな」
私とビオスさんは揚げたてのニンニクをお皿に盛り、塩を少しだけパラパラとかけた。
「ジョンさん、作業お疲れ様！　よかったら食べて」
お茶と一緒にニンニク揚げを出した。
すると、ジョンさんは笑みを浮かべる。
「おー！　美味そうな匂いはそれか、でも食べちゃっていいのか？」
「窯を作ってくれてるんだもんいいよ。それにみんなに評判よかったら食堂でも出せるし、味見っ

て事で」
私はパチッとウインクする。
「それなら……おいみんなミラとビオスのおっさんから味見のおすそ分けだ。ありがたくいただこう」
「待ってました！」
みんな聞き耳を立てて話を聞いていたようだ。
ジョンさんの合図と同時にこちらに向かってくる。
「おー！　美味そうな匂い、これなんだ？」
みんなニンニクをつまむとヒョイッと口に入れる。
ホクホクの食感に頬を赤らめながら夢中で食べている。
「この塩気が疲れた体に沁みる！」
「甘くて美味いなー」
「それにこの香り……たまらん！」
みんなパクパクと我先にと食べだした。
「あー！　みんな食べ過ぎはよくないよ、お昼ご飯もこのあとあるしね」
「そ、そうか……」
みんな私の忠告を聞き、みんな掴んでいたニンニクを見つめて固まる。

「それで最後にしておこうね」
「おう！」
みんなは惜しむように最後の一粒を大事そうに食べていた。
その後、みんなは気合を入れて、窯作りに取り組んでくれたのだった。

◆

数日後、みんなのおかげで窯は見事に完成した。
その期間も新しい料理を色々と味見してもらえて、私としても楽しい期間だった。
今日は窯の性能を確かめるためにビオスさんがピザを焼くらしく、上手く出来れば看守を招いてお披露目をする予定だ。
看守が集まるという事で、私はジョンさんの牢屋でお留守番である。
「じゃあみんな頑張ってね」
わざわざ様子を見に来てくれた調理部のみんなにエールを送る。
「ミラが考えてくれたレシピを忠実に再現するからな。ミラは安心して休んでてくれ、昨日まで下準備も手伝ってくれてたしな」
ビオスさんが頭をポンポンと撫でてくれる。

立ち読みサンプル
はここまで

「みんな行ってらっしゃい！」
私は笑顔でみんなを送り出した。

◆

ミラを部屋に残したまま、俺――ジョンはビオスのおっさん達と厨房に向かった。
窯の最終確認と、ちゃんと機能するか確かめるために俺達も今回立ち会う事になったのだ。
「はぁー、ミラちゃんも一緒に入れたらいいのにな」
「今回のレシピだってほとんどミラちゃんのアイデアだぜ」
俺と一緒に窯づくりをした連中は、みんなミラがこの場にいない事に肩を落としている。
健気に送るミラの手前、さっきまではみんなで平気な顔をしていた訳だ。
ミラもみんなの手前なんでもない振りをして送り出していたが、寂しそうな顔は隠せていなかった。
俺は励ますように口を開く。
「仕方ない、看守に見つかる訳にはいかないからな」
「そうだな……」
みんなそれが最善だと分かっているが、やはり寂しい事に変わりはないようだ。